

結束の流儀



後半アディショナルタイム、表示された2分が経過したラストプレー。左サイドから中村司が投げ入れたボールはゴール前に狙い通りの軌道を描いて届いた。

いつでも投げられるように練習を重ねたプレー。だが、公式戦で投げたのは初めてだった。ちよつとした運なのかもしれない。偶然、練習と同じ立ち位置からのスローインになった。完璧に練習通り、ボールめがけて野村裕土が走り込む。しかし僅かに野村には合わず、代わりに原口洸がヘッドで同点ゴールを押し込んだ。2-2の同点。NACK5スタジアムはこの日一番の歓声に沸いた。

昌平との準々決勝、ともに初の四強進出を懸けた息詰まる攻防は延長戦へ突入した。

オランダ流との出会い

聖望学園高校サッカー部監督、山本昌輝は1976年、東京都羽村町(現・羽村市)に生まれた。身体を動かすのが大好きな少年が最初に始めたスポーツがソフトボール。野球好きの父親に連れられ始めたものの、打席の順番待ちに我慢できなかった。小学校2年生のとき、友達に誘われたのがサッカー。順番待ちがない、ずっと動いていられる球技に惹かれた。地元の松林少年SCで過ごした小学校時代はFWからGKまで、すべてのポジションを体験。羽村市立第三中学校では俊足を活かしてFWを任された。長身のFWと組みながら、得点を挙げる喜びを感じ、ますますサッカーに打ち込む日々を過ごした。

92年、東海大学菅生高校に入学。サッカー部は全国を目指す位置につけていた。山本は層の厚い部活で揉まれ、40人程いた同期生が3年時には半分に減るほどの厳しい練習に耐えたが、試合には出られなかった。「このまま(高校では)終われない」とこの悔しさが、サッカーを続ける原動力になった。

日本体育大学に進んだ山本は、ここで人生を左右する人物と出会うことになる。96年、山本が2年になったとき、サッカー部の監督にオランダ人のアーリー・スカンス氏が就任した。関東大学リーグ初の外国人監督となったスカンス氏はオランダのトップライセンスを取得、後にブータン代表監督、大分トリニータのコーチに就くなど、理論派の指導者。当時はカウンター攻撃が主流だった日体大に「つなぐ」サッカーを導入した。練習では常にボールを使ったトレーニングを実施。選手に状況判断を求め、考えさせる。システムに関しても柔軟な思考で複数のポジションをこなせるよう求めた。

山本は当初、このやり方に適応できずに悩んだ。練習後に感じるのは、肉体的な疲労よりも、頭を使った疲労。サッカー部内の位置は、いつしかBチームへと落ちていった。そんな折、スカンス監督が「指導者を育成したい」と大学に申し入れ、まずは日体大サッカー部員を対象にした指導者ライセンス講習会を学内で開催することに。山本はこの講習会に参加した。理論と指導実践と試験。約3ヶ月の講習だったが、今まで自分が知らなかったサッカーのおもしろさを学んだ。



練習では常に受け身だった自分の意識が、180度転回する思いだった。大学4年で試合中に足首を負傷したこともあり、指導者への道を志すようになった。

現場で受けた衝撃

大学を卒業後、家業を手伝う傍ら、母校の羽村第三中学校でサッカー部の外部コーチ募集に志願し、指導者の道をスタートさせた。オランダのコーチライセンスを取得し、スカンス監督の「オランダ流」に傾倒していた山本は意気揚々と練習の場へ乗り込んだ。理想を持ち、自信もあった。状況を判断してからプレーする習慣づけ、ポゼッションの練習、マーカーを使ったグリッドでの練習、指導者が最初から答えを提供しない方法論……いわゆる「教科書どおり」のやり方だ。

しかし、子どもたちは食いついてこなかった。練習がうまく回らなければ、試合に勝てるはずもない。負けが込むと、部員は練習にも来なくなっていた。山本自身、スカンス監督と巡り会った当初は戸惑いもあり、反発も感じた。そのことをなぞらえると、中学生の感情が理解できた。

そこで山本はオランダのサッカー指導教本をすべて捨てた。自分だけの方法論や、今までの形にとらわれない指導法を模索。試行錯誤を繰り返しながら、サッカー指導者の卵はようやく歩みを始めた。当時低迷していた羽村第三中学校は、入部希望者が例年5〜6人の弱小クラブだったが、山本が関わった6年間で20〜30人が入部するまでになった。6年目には東京都大会に進出し、ベスト16まで勝ち上がった。山本はこの間、小中・高校、定時制高校や養護学校の非常勤講師として都内の教育現場で経験を積んだ。種々の年代の子どもたちとふれあう中で、人と人との信頼関係の重要性を肌で感じ学んだ。

04年のことだった。羽村第三中学校から聖望学園高校に進学した卒業生から、「サッカー部がコーチを探している」という情報を得た。これがきっかけとなり、05年4月から聖望学園高校サッカー部に外部コーチとして加わるようになった。

新天地でつかんだ自信

飯能市に位置する聖望学園高校は山本の地元・羽村市から近い。都県境をまたぐが、直線で14kmほどの距離だ。聖望学園はキリスト教教育を理念に掲げ、スポーツにも力を入れている。山本が05年に加わった当時、サッカー部はまだ実績に乏しく、選手権大会は一次予選の壁を越えられずにいた。憧れの高校サッカー指導者としてスタートした山本だったが、埼玉の高校サッカーは生やさしい現場では無かった。東京で生まれ育った山本は、

都内の高校サッカーのレベルは周知していた。東京の加盟校数は埼玉より遙かに多いが、上位と下位の実力差は大きく、地区予選レベルでは大味なゲームが繰り返されることもしばしばだった。ところが埼玉は地区予選のレベルがおしなべて高く、聖望学園が所属する埼玉県西部は当時、西武台を筆頭に、川越南・所沢西・飯能南の公立勢と、武蔵越生・東京農大第三(現・北部支部)ら私学勢が追い上げる激戦区だった。「えらいところに来てしまった」。率直に現場の熱気を感じながらも、しかし熱心な指導者が多い埼玉で勝負することを決めた。

翌06年4月、山本は学校職員に採用され、正式にサッカー部監督に就任した。同時にサッカー部が強化指定を受け、この年、山本が声をかけた6名が入学。2年後、彼らを主軸とするチームが旋風を巻き起こすことになる。

新天地で実績を上げるのは容易ではない。県内で練習試合を組むのにも苦労した。大学時代のつてを頼って先輩の指揮する埼玉栄(磯貝一直監督)に胸を借りた。県外の遠征もしかしり。日体大OBが指導する関東圏のチームと修練を積んだ。中学生のスカウト活動も、当初は埼玉のクラブは相手にしてくれなかった。山本は旧知の羽村・青梅・あきる野・西多摩地区から人材を呼び寄せ、強化をスタートした。

06年4月に入学した部員にまず説明したのは「3年の選手権まで頑張る」と。それまで、3年生は5〜6月の総体県予選を最後に引退するのが常だった。山本はカルチャーショックを覚えたが、この代からチームの最終目標を王道の選手権大会に改めた。



08年、勝負の年。関東大会県予選、総体県予選とも県大会に駒を進めた。夏、一次予選をついに突破。二次予選リーグも浦和南と同居するグループを2位で通過した。躍進は続く。トーナメント1回戦で優勝候補の西武台に2-1で競り勝つ。聖望学園は山本の戦術を理解し高いレベルで実践した。前線からDF陣まで、それぞれのラインが連動性を持つ

て動き、西武台の速さとパワーを打ち消した。準々決勝、大宮東との接戦は惜しくも0-1で敗れた。試合を通して18回も相手をオフサイドに陥れた。決定打の差で四強入りを逃したが、自分たちのスタイルを貫くことができた。「3年間かけて取り組んできたサッカーが、強豪相手に通じるか。不安はありましたが、この結果に自信が深まりました」。山本がつかんだ自信。だが翌年、思わぬしつぱ返しを受けることになる。

苦悩の始まり、そして...

前年の躍進を経験した主力メンバーの半数が残り、09年は四強以上を目指す自信に溢れていた。力は前年よりある、と。しかし現実には厳しかった。新人大会から3大会続けて県1回戦敗退。目指すサッカーはできても、勝ちきれないジレンマを抱えたまま、最後の選手権大会も二次予選1回戦で散った。相手は昨年と同じ大宮東。先制しながら逆転を許し、延長で再逆転を喫した。一瞬の隙を突かれて決勝点を献上、まるで「サッカーに勝って、勝負に負ける」ような状態に、山本はもどかしさを拭えないままシーズンを終えた。

この年、結果が出なかった、いや、選手に結果を出させてあげられなかった。山本は悩み、自分を責めた。「何かを変えない」と思った。ただ、それが選手へのアプローチなのか、練習方法なのか、戦い方なのか。迷いは深くなるばかりだった。10年、11年の2年間はシステムを変えたり、持ち前の攻撃サッカーを守



備重視にもした。迷走する山本に、選手はそれでも付いてきてくれたが、勝てない不安は拭えず、ここぞの場面で力を発揮できないでいた。

「監督が迷っている場合じゃないだろ！」周囲の指導者から励ましを受け、山本はようやく迷いを振り切ることができた。翌12年、チームスタッフも一新、「原点に戻る」ことを決めた。総体県予選で過去最高のベスト8へ進出。これでチーム初の夏の選手権一次予選免除を勝ち取った。「聖望学園のサッカーで勝負する」。チームに漂っていた重い空気がようやく晴れた瞬間だった。

信頼関係がささえた主将交代

ことしの3年生がまだ1年生だった2年前、山本は迷いを吹っ切るために1年生だけでミーティングを重ねたり、遠征に連れて出たりして聖望学園のサッカーを教え込んだ。個々の能力は平均的。「彼らの能力や選手層を育て、2年後に勝負できたら、方向性は間違っていないことになる」と山本は腹をくくったのだ。

13年、新人大会は支部予選で敗退。そこで大胆なコンバートを実施した。DF陣は福島拓を残してFWとMFから移動。

GK浅見俊貴を含め、守備陣は戦術理解度の高いメンバーを揃えた。彼らは山本を信じて疑わず、移動後のポジションを勉強した。5月、山本の誕生日に3年生全員が寄せ書きの色紙を贈ってくれた。「このサッカーで全国に行きたい」：異口同音に書き記された3年生の想いを知り、山本は手応えを感じずにはいられなかった。

総体県予選で結果は出せず、選手権は一次予選に回った。勝負の夏を迎える直前、ここでチームに激震が走った。サッカー以前の問題：山本は部員の生活態度を厳しく叱責し、主将を野村裕土から荒木智泰へ交替させた。「このチームはお互いの信頼感が強く、なにより結束力があつた。だからできたこと」と山本は振り返る。野村は腐らず、ここから一層頑張った。厳しい夏の合宿は、チームの精神的なひ弱さを克服する期間になった。一次予選、草加との代表決定戦は嫌な展開になった。シュートを30本近く浴びせても1-1の同点。「今までなら負けている」。勝負どころでの脆さを露呈するような試合だったが、後半終了直前に野村が決勝ゴールを奪った。チームの仲間も、保護者も、皆が涙してこの勝利を分かち合った。

——息がつまるような延長戦は互いに決定的な場面をつくれず、PK戦になった。円陣を組む聖望学園ベンチ。「このPKを乗り越えないといけないんだよな」。山本の言葉で円陣に笑顔が広がった。先の総体県予選でPK戦敗退。それから練

習を積んだ。「よし、順番はオレが決める、責任はオレにあるから」。次々とメンバーの名前が呼び上げられるたびに、円陣から大きな歓声が響き渡った。

得られた伝統をベースに

土壇場での同点劇。昌平との準々決勝を冷静に振り返ると、「今までの経験からすると、負ける流れではなかったと思う」。そして試合後のミーティングで山本は選手にこう語りかけた。「あの流れで勝てなかったのは、『続き』があるからだよ。確かに、あそこまではうまくいった。このチームには何かある、と感じられた。修行が足りないのだ、と敗戦を受け止め、次に進む。このチームによって、伝統が築かれたのだから。

ことしの3年生は監督の戦術を咀嚼して、下級生を集めて自主的にミーティングを実施。監督抜きのミーティングは昨年から続くものだった。主将交代の劇薬もあつてか、生活態度も目に見えて向上した。マネージャーも部員の結束を支える。こうした積み重ねが「上を目指す」一体感を生んだ。技術、戦術だけではなくどうしても超えられない壁がある。チームの団結力はその壁を乗り越える力となる。山本がことし、改めて痛感したことだ。

「リスクは大きいけど、リスクを感じさせない攻撃的なサッカーを目指す」。山本の理念にもう、ブレは無い。志は高く「全国制覇」を掲げる。「ずっとそこを目標にすることが大事ですからね」。柔和な笑顔



の瞳が輝いた。

選手権大会の敗戦後、さすがに選手は一週間ほど放心状態だった。しかし、残り2節あるS2リーグが残っている。もう一度チームを奮い立たせるのは非常に厳しいが、敢えて山本は3年生に語りかけた。「残り2試合、絶対に勝つてS1に上がる。3年生でやるぞ」。

3年生は見事に応えた。連勝で締めくくり、来季のS1リーグ昇格を決めた。最後は笑顔で締めくくることができたのだ。

『続き』は来年に託された。しかも一段上の舞台で。伝統を纏った聖望学園の物語は、まだ始まったばかりだ。

※文中一部敬称略

取材協力／聖望学園高等学校サッカー部
取材／文／藤田雅彦